

【短歌・俳句の部】

《短歌》

太平洋戦争の短歌

(文責 広報あびこ短歌欄選者 榊原 敦子)

六十五年前、四年間に亘った太平洋戦争は終結した。その四年間にわれわれ庶民が肉親と共に体験した(或いは、伝え聞いた)異常な体験は、筆舌に尽しがたいものがある。それは、ここに掲載した歌の中にもあるように、生涯語り得ぬほどの深傷ふかでを人々に与えもした。生き地獄の闇を語る言葉を人は持たない。

人々は逃げ惑った。人々は焼かれ、或いは焼け出された。人々は飢えた。人々は大切な誰彼を戦地で、或いは居住地で、惨く失った。なんとか生き延びた者、生還した者も、深く肉体に精神に傷を負った。戦争は少しもカツコよくななどない。

終戦ののちも生き延びるため、即ち「食う」為に、男も女も売れるものは全部売った。モノも節操もプライドさえ…。

戦争は、人を生きながら悪魔に変える。人に人の尊厳さえ許さない。このような状態は、しかし、誰あろう他ならぬわれわれ人自身が起こすのである。このことを心に深く刻み込んで行動する必要を痛感する。

ここに掲載する短歌作品はそれらを如実に伝えている。

われ抱^{かか}へ防空壕へ走り行く母の恐き目いまに忘れず
幼^{をこ}きは防空壕の暗闇を炒り米もらへる場と思ひるき
母さまはもんぺを穿きて竹槍に人形^{ひとがた}を突く敵兵を突く

渡辺 詔子（高野山在住）

長病める少女サダコの死を告げて師は「原爆を許さじ」と言ひき

平林 健次（湖北台在住）

君は今八十四歳十五歳^{じふご}にて B 29 を撃墜せしと

東海林 壽和（寿在住）

駅頭に万歳叫びし父にしてはるかニューギニアのジャングルに消ゆ
グラマンの機銃掃射を用水に飛び込み逃れし杳^{とほ}き夏の日

川上 幹夫（船戸在住）

壕の上わが身おほひて座りたる爆風耐へし母を思へり
疎開地に母の持たせしお手玉をやぶりて中の小豆あづきを食たぶ
終戦に疎開先より帰りたれば父は仏と成り果ててをり

黒澤 里子（若松在住）

空襲の爆風おそれ窓硝子に縦横斜めに和紙を張りたり（新かな）
グラマンの機銃掃射がバリバリとトタン屋根をば撃ち抜き去れり
検閲のため米軍が開封し信書を閉じしセロテープはも

白杉 政幸（白山在住）

中枢は飢ゑることなく工兵から飢ゑて死したる玉砕の島
復員兵ふ狂ふれて還りて朝なさな日の出ひに向むきてバンザイ止やめず

木崎 洋子（日秀在住）

息絶えし弟を背に茶毘を待つ少年ありき被爆長崎

この子等に軍靴の音を聞かせまじ一人出かける護憲集会

渡辺 正夫（我孫子在住）

十歳 八月の少女 稔の田 いくさにやぶれ 頭巾を空へ

千葉 フミ（泉在住）

つひにつひに赤紙父に來たりしが出征前に終戦となりぬ
空覆ふ火焰のごとき夕焼けに学舎^{まなびや}呑みし空襲おもふ

古内 静江（つくし野在住）

書かるなき姉の戦後史ふたり子の墓標の下に遺骨はあらず
抑留の日々を語らず兄逝けりシベリア^{とほ}杳き余白のままに
麗々と墓石に彫られるたりけり「陸軍歩兵上等兵」と

石河 和子（寿在住）

父母の遺影に並ぶ軍服の眉濃き兄は孫より若し

戦ひに逝きたる兄の三倍を生き来て万朶の花を浴びをり

櫻永 文子（つくし野在住）

終戦日ちかづくたびによみがへる「国民学校」五年の猛暑

川上 進也（東我孫子在住）

征きし子を語ることなき九十歳の祖母が今際に叫びしその名

疎開地に三年ねむりしわが雛雪つむ音を耳朶に秘め持つ

池田 弓子（天王台在住）

そら仰ぎ「いい天気だなア」と出で行きて自裁せりけり徴兵されぬは

草を食み馬の尻尾に縋りつき生還したりインパールより

「これ以上なに頑張るのだ」と叔父逝けり帰還兵にて病みさらばひて

榊原 敦子（白山在住）

戦^{いくさ}やみ四年後シベリヤより帰り八年のちに父病死せり

真珠湾は三重県かと問ふ若きありと昭和ことは八十五年

小島 順也（つくし野在住）

（短歌は旧仮名遣い、本文は新仮名遣いです）

《俳句》

句に詠まれた戦争・戦後

(文責 広報あびこ俳句欄選者 染谷 卓)

『戦後六十五周年記念誌』に俳句作品をと言うお話で、市俳句連盟加入団体の皆さんに呼びかけましたところ、あんびこ句会、さわらび句会、蟬噪会、はつはな句会、水無月句会等から四十八名の寄稿がありました。

「伝えたい戦中の体験、戦後の苦労、戦争と平和について思うこと」がテーマですが、これに沿った作品をとということになると、「戦争と平和について」はいざ知らず、「戦中の体験」では、これを持つ人が少なくなりつつあることから、そんな句が寄せられるかどうか心配でした。また、苦労を詠んだ句でも、それが「戦後の苦労」だと領けるような句作りということになると難しいことです。

このように、題材や内容的に見て、他のジャンルの作品のように多様な内容を語り得ず、特に俳句が季語を詠み込むという特徴や制約のあることから、季語である原爆忌や終戦記念日への思いを詠まれた句が多くなったようです。しかし、それなりに印象強く、率直な心情の読み取れる句が多く寄せられました。

遊ぶこと知らぬ八十路の終戦日

荒井 朝子
(白山在住)

敗戦忌六十四たびなほ起てず

野の道にみみずの乾からび敗戦忌

山河また炒らるるごとく敗戦忌

石田 清
(取手市西在住)

教科書より消えたる唱歌枇杷の花

伊藤 千代寿
(新木野在住)

泣かされて帰宅の幼時敗戦日

岩崎 素治
(若松在住)

あの頃は飢のみしらみゑ蚤虱雲の峰

命ある限り黙禱原爆忌

敗戦忌われ幼弱の少国民

上野 悌嗣
(青山台在住)

敵機来ぬ少年の日なり敗戦日

瓜生 敬一
(白山在住)

営庭ばんだの万朶の花の記憶かな

忘却の彼方となりし開戦日

大杉 栄一
(青山台在住)

陰膳や炊きしばかりの栗の飯

大海 かほる
(高野山在住)

耕馬みて軍馬は還らず父の里

螢火や学童疎開の寺の闇

忘れ得ぬ暑さ敗戦日近づけば

及川 力哉 (東我孫子在住)

どこまでも続く虚空や終戦日

母の瞳めに光もどりし終戦日

尾張 幹 (つくし野在住)

薬くすりや戦禍知らざるもの増え

嘉戸 健治 (湖北台在住)

遥かなる海軍記念日卯波起つ

花吹雪知覧の空は哀しけれ

岡本 邦男 (湖北台在住)

戦災をかぶりし大樹ひこばゆる

壁谷 千鶴子 (湖北台在住)

熱き土裸足の記憶敗戦日

耐乏の話まばらに終戦忌

鬼沢 徳三 (台田在住)

暑かりし日とのみ記憶終戦日

川上 進也 (東我孫子在住)

そのピアノ雷雨のごとく終戦日

暗幕を外す思ひ出終戦日

川上 英明 (さいたま市在住)

黒板に字の消え残り終戦日

小俣 たか子 (泉在住)

八月の空に届けよ鎮魂歌

北見 美智子 (湖北台在住)

瘦せゆく子連れて凍土に皿洗ふ
租国遠し抑留のまま露と消ゆ

倉持 布く (寿在住)

原爆忌魂やどす千羽鶴

栗林 ひろし (我孫子在住)

長い日の玉音畏終戦日

生きのびてまた敗戦日めぐりくる

桑島 昭治 (寿在住)

山削り墓地を拓げる敗戦忌

小嶋 節子 (栄在住)

玉音聴くラジオ雑音炎天下
炊事兵と豚捕まえる終戦日
特攻機涙で送る雪の朝

機密文書夜昼燃やす終戦日

敗戦後任官を知る軍歴書

後藤 茂 (東我孫子在住)

爆心地今年も薫る風絶えず

迫平 正孝 (つくし野在住)

房総へ逃げ終へて直ぐ終戦日

茶毘に付す背ナの傷跡敗戦日

渋谷 多佳子 (根戸在住)

米麦にかえたる籾の行方かな

島崎 妙子
(天王台在住)

すいとんの煮つまりこげし終戦日

高橋 京子
(中峠在住)

敗戦忌嗚呼ジープ闇市粉ミルク

コーラもて喉をうるをす原爆忌

終戦日生き抜きて古稀大地の子

千田 明幹
(青山台在住)

鈴木 孝輔
(つくし野在住)

折づるの数の重さよ原爆忌

黙禱の妻直らない広島忌

折鶴に祈りを重ね八月来

中村 久一
(東我孫子在住)

園山 露子
(若松在住)

防空壕跡の木太り終戦忌

謝りて済むものならず原爆忌

八月十五日正午の油蟬

夏目 章生
(我孫子在住)

染谷 卓
(下ヶ戸在住)

穂^{たら}摘みて戦後生きぬく糧のこと

鉢巻きはこころに結び敗戦忌

浜田 典子
(若松在住)

シーソーの真ん中にゐて終戦日

原爆忌あの日へ草も木も黙す

原島 典子
(竜ヶ崎市小柴在住)

花火のごと人間に降る焼夷弾

街襲ふ艦砲射撃熱帯夜

八月や胎内被爆の友ありて

敗戦日ラジオは大き箱なりき

増井 武雄
(我孫子在住)

向日葵に真向かふ知覧散華の碑

かなかなも人も戻らずきのこ雲

原田 実
(天王台在住)

母の着物米と換へたる終戦日

三上 佐智子
(古戸在住)

平和かな終戦記念日知らぬ子ら

軍服の父遠き人敗戦日

藤掛 陽子
(古戸在住)

まなうらに焦土茫々終戦日

終戦忌十五の我がそこに居て

道関 みさ
(天王台在住)

忘れたい忘れられずに終戦日

本沢 典子
(久寺家在住)

被爆せし大楠今は大緑蔭

光成 敏子
(南新木在住)

位里いりの図の暑き日熱し熱し熱し

石田 安（中里在住）

蓑田 淳子（中峠台在住）

敗戦忌消えし学徒の特攻機

山中 仁一朗（青山台在住）

大空を仰ぎ黙禱原爆忌

吉江 君代（新木野在住）

開戦日炎をあげて肉を焼く

サングラス厚木の一步より戦後

遠郭公とおかくこう進め進めと軍馬の碑

吉田 三重（つくし野在住）

食糧難校庭すべて諸畑

終戦後

幼十名で呼ぶ友と会ふ終戦日

渡辺 護（下ヶ戸在住）

私は、昭和十一年霞ヶ浦湖畔で生れ、小学校三年の時終戦。隣家で玉音放送をラジオで聞いた。終戦前後の記憶を俳句にしてみた。

霞ヶ浦の湖畔で飛行機の戦闘を見る

戦ひぬ霞ヶ浦の赤トンボ

終戦の日昭和二十年八月十五日

終戦の玉音哀し蟬時雨

共同責任

桜散る戦時教師の平手打

食糧増産政策により学校の運動場が諸畑いもばたけに

食糧難校庭すべて諸畑

終戦後

砲弾の雨から帰りし生身魂いきみたま

【聞き取りの部】

布佐での戦争体験

石井 政男（並木在住）一九三四年生

私は昭和九年四月二十八日、我孫子市布佐（現「わだ幼稚園」近隣）で七人兄弟妹の三男として生まれました。（その頃の布佐周辺の地図を描いてみました。）

昭和十六年四月に布佐小学校に入学、同年十二月八日戦争が始まると間もなく小学校は布佐国民学校に変わりました。四年生になると、選抜されたのか応募したのか覚えていませんが、少年航空隊への特訓を受けることになりました。当時、青年学校の教官をしていた厳格な父が頼んだのではないかとも思います。学校から五人選ばれ、自分のことはわかりませんが、他の仲間達は体力、成績ともに優秀な子供達でした。全国的に学校ごとに競争でした。

少年航空隊への特訓は毎日放課後に行われ、軍服を着た教官から航空兵として必要な学科や実技を厳しく教えられました。問題を間違うたびに長い細竹の棒でカチツと叩かれましたが、誰一人、決して涙を見せませんでした。竹の棒が割れると、自分達で新しいのを作って持つていくのです。毎日腹を空かし、暗い帰り道に見上げた白い冬の月は忘れられません。特訓は昭和二十年、五年生で迎えた終戦の日まで続きました。あの時戦争が終わらなかつたら航空兵になって特攻隊に入っていたかも知れません。ただ、特訓を受けて基礎学力が身についたことは後々役に立ちました。

国民学校では防空訓練や手旗信号などの軍事訓練があり、高学年の女子は長刀、男子は銃剣突など軍服姿の教官から教えられました。毎日、朝礼の時に校長先生を先頭に「宮城遙拝所（注171）」（地図参照）に立ち、宮城に向かって最敬礼をして戦勝祈願をしました。食料難でしたから、運動場は芋畑になり、畑作りや戦時教練で勉強時間は少なくなっていました。幸い布佐には岡田武松先生（気象学博士・中央気象台長）の開かれた「少年文庫」があり、活字に飢えた子供達がよく通ったものです。その頃読んだ文語体の小説など今でも暗誦できます。岡田武松先生直々の指導を受けた子供の一人でした。昭和二十二年三月、国民学校最後の卒業生としてもらった卒業証書は、ガリ版刷りの小さいものでした。

戦後、昭和二十二年度から学制が替わり、私は新制中学校になって最初の中学生です。布佐中学校の校舎を建てるため、兵舎を解体した材木や屋根瓦などを運ぶ手伝いをしたり、運動場の埋め立て整備もしました。私の六年生から中学入学の頃は終戦直後の混乱期で、校舎を建てる手伝いなどで殆ど休校同然でした。今はその木造校舎はなくなり鉄筋の校舎に変わりましたが・・・。

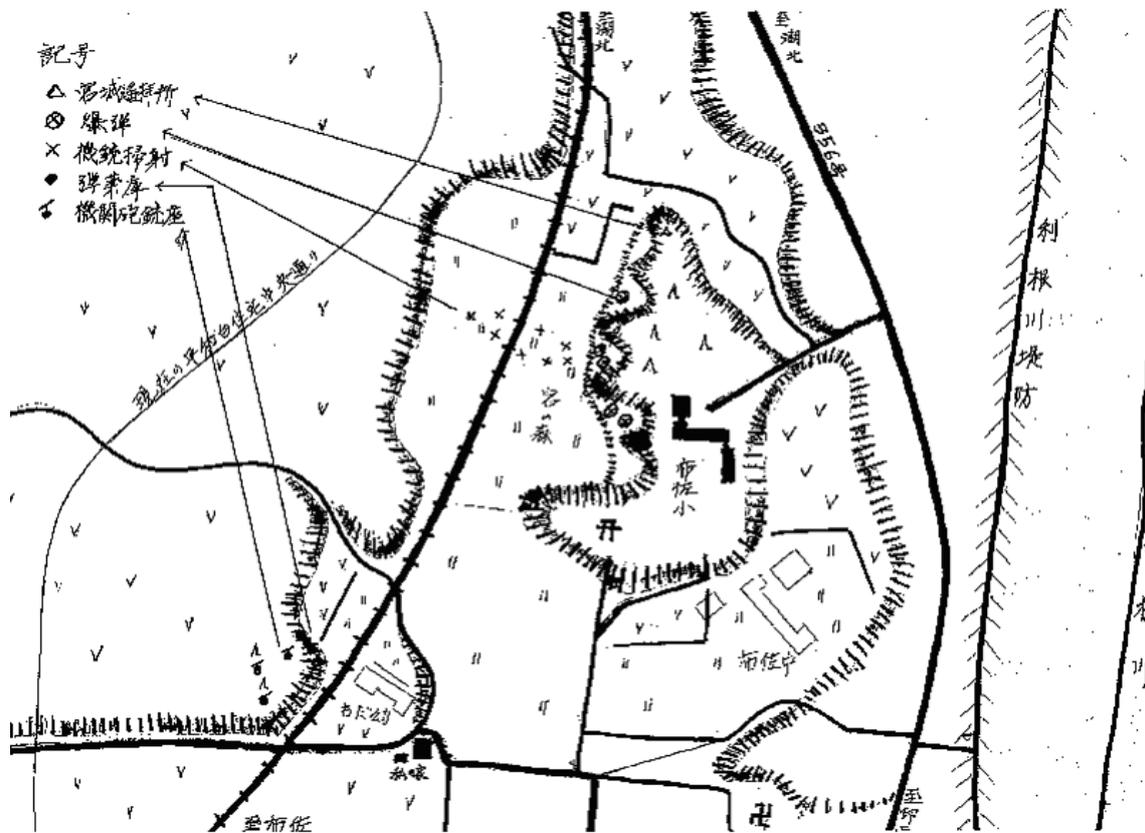
戦争中、私の家は十一人で住んでいました。兄と叔父は出征していたので私たち家族と疎開してきた親戚の人たちです。各部屋を家族ごとに割り当て、食料の乏しい時でもあり、それぞれ別々に食事を作っていました。米の飯はめったになく高粱だったのか赤い色をした雑穀のご飯や、自分達で作った野菜を食べてしのぎ、いつも腹を空かしていました。東京大空襲の時には我孫子の西の夜空は真っ赤に見え、まだ火の粉が付いている燃えかすが降ってきました。翌日、三河島にいた従姉が髪を焼かれ着のみ着のまま、カナ盥（たらい）ひとつ持って夜通し歩き、やっと我が家まで辿り着いたのを覚えています。

地図は、私の記憶にあるままに描いたものです。記憶にある布佐地区は実戦の場でした。昭和十九年後半になると頻繁に、アメリカの艦載機が房総の海側から利根川沿いに飛んできました。当時、現印西市草深に印旛航空隊があり戦闘機が配備さ

れていたので度々空中戦がありました。撃たれた戦闘機から落下傘で脱出した日本兵が布佐側の堤防近くに落ち、鼻血を出して死んでいるのを見ることがあります。布佐国民学校の校舎の一部が兵舎になり、私の家から線路を隔てた所に、機関砲銃座と弾薬庫が置かれていました。命中することはなかったが、艦載機を迎え撃つ為に配備されていたのだと思います。それがあつたからか、この布佐に小型爆弾も落とされました。最も、帰艦の艦載機が飛行機を軽くする為、残った爆弾を無差別に落としていったとも言われています。ある時は貨物列車に向かって機銃掃射を浴びせました。当時その一帯は田畑や雑木林で人身に何事もなく幸いでしたが、私の家から数百メートルの所で起きた空爆の数少ない目撃者です。一番怖い思いをしたのは、突然急降下してきた艦載機を真正面から見た時です。凄まじい爆音の中、アメリカ兵の白い顔がはつきり見え、服が風に揺さぶられる音が聞こえる位の距離に、心臓が止まるかと思いました。これが戦場さながらの布佐で、当時十一歳の私が体験した戦争中の記憶です。

沖繩や広島、長崎のことは誰でも知っています。同時に、日本中のどんなに小さな町や村にも様々なたちの戦争の悲劇があつたことを忘れてはならない。私は、少年飛行兵になることもなく平和な日々を送っているが、その有難みを後世に伝えていかなければと思っています。

(文責) 濱田洋子 加藤マリ子



当時の布佐周辺の地図（石井政男さん書）

戦争体験の聞き取りをして

ボランティア 加藤 マリ子

石井さんは、ご自身で書かれた地図を用意し、私たちを迎えてくださいました。当時の布佐小周辺の地形と様子が一目瞭然で、当時を知る貴重な資料となりました。布佐小の一角が兵舎になっていたこと、斜面に弾薬庫があったこと、艦載機が海側から利根川沿いに飛んできたこと等を知りました。

布佐国民学校の時、クラスで五人選ばれ、少年航空隊の厳しい特訓を受けたことを話されました。その中で「なぜ、自分が選ばれたのか分からない」と何度も呟かれました。私は、この方が大変優秀だったから選ばれたのだと直感しました。

同時に、当時子ども達を戦場に送ってしまった教師（竹本源治）の詩を思い出していました。

逝きて還らぬ教え兒よ 私の手は血まみれだ

君を縊くむったその綱の 端を私も持っていた

しかも 人の子の師の名において 嗚呼ああ！

教師は皆、職務に忠実で熱心な人だったに違いありません。しかし、教え兒を死に向かわせることに抵抗できなかった当時の異常さは、日本中に蔓延していたと聞きます。近頃「みんなと同じに」「空気を読む」など同じ方向を好む傾向が若い人たちに見られますが、とても危ういと感じています。その場に応じた対応は必要ですが、自分の力を駆使して自分で判断

をすることはもっと大事です。いざという時に的確な判断をするために私たちは学ぶのではないのでしょうか。詩は続きます。

「お互いにおまされていた」の言い訳がなんでできよう

慙愧ざんき、悔恨かいこん、懺悔ざんげを重ねても　それがなんの償いになろう

逝った君はもう還らない

今ぞ私は汚濁の手をすすぎ　涙をはらって君の墓標に誓う

「繰り返さぬぞ　絶対に」

命を守り、育むべき者が全く逆のことをしてしまった戦争中の負の体験。二度と繰り返さないために何度も語り、書き続ける必要があります。なぜなら、人間はとても忘れっぽい生き物だからです。

石井さんは戦地に行くことなく、終戦を迎えました。石井少年を航空隊に選んだ当時の大人達は安堵したに違いありません。生かされた命です。いつまでもお元気にお過ごしください。

聞き取りボランティアの感想

ボランティア 濱田 洋子

戦争体験は、当時その人の居た場所、年齢、性別、立場などによってそれぞれに異なり、感じ方も記憶も多様です。聞き取りボランティアをして痛切に感じたことであり、お話されたことを真摯に文章化しなければと思いました。

石井政男さんは私より二歳年長ですが、国民学校で受けた戦時教練は男子ということもあり、非常に厳しく体感されたと思いました。国民学校卒業後は少年航空隊に入る運命に置かれ、選抜五名の一人として特訓を受けたことは、戦争体験の中でも生涯忘れない事の一つと思います。折にふれ、特攻隊の飛行兵士達が飛び立った知覧を訪ねて、冥福を祈っていると聞きしました。

石井さんは聞き取りで伺わなくても、自分で書ける方と感じましたが、公募の広報記事に気付かず、知人の勧めで「聞き取りによる寄稿」にされたそうです。当時の「布佐の地図」を描いて待つて居てくださいました。我孫子の中で布佐が実戦の場になっていたことなど知らなかった私達に、姿勢を正しながら数々お話をくださいました。これからも世界の平和を願わずにはられません。

私の戦争体験 ― 軍艦「霧島」「榛名」とともに

井芹 寅雄（布佐平和台在住）一九一八年生

私は大正七年三月十四日生まれ、現在九十二歳です。八十八歳の時、長年住み慣れた九州の熊本の地より、娘夫婦が住む我孫子市布佐平和台に転居し、やがて五年になります。川と田圃に囲まれたこの地の長閑な風景は、私の田舎によく似ています。

私は、幼くして両親（父一歳、母六歳時）に死別し、母方の実家の熊本県上益城郡白旗村の養父母のもとで育ちました。当時母方の実家は農家で田畑山林数十町歩を所有する地主でありました。家業の農業を手伝っていた昭和十一年十二月に徴兵され、翌十二年一月に佐世保海兵団に水兵として入団しました。そして五月には軍艦「榛名」に三十六糎（センチ）砲員として乗り組むことになりました。

私の軍隊生活は、数回の海軍砲術学校の練習生および鳥取県美保の海軍航空隊の教員時代を除くと、大部分が軍艦「榛名」「霧島」とともにありました。入隊直後「榛名」に乗り組むや支那事変^{注172}が勃発し、連合艦隊の主力部隊として参戦することから始まりました。一年後、砲術学校に入校し卒業と同時に今度は軍艦「霧島」乗務となりました。

この「霧島」では真珠湾攻撃、ミッドウェイ海戦などの重要な海戦に参戦しました。ミッドウェイ海戦では我が国の航空母艦の数艘が米軍爆撃機の猛撃を受け沈没しましたが、我々の「霧島」はその中の航空母艦「飛龍」が沈没していく最期を、その周りを三回ほど旋廻しながら見送りました。「後を頼むぞ」と沈み行く母艦からの叫びに「心配するな」と叫び返した

あの時の光景は今でも胸が詰まる思いで鮮明に蘇ります。その後、「霧島」も第三次ソロモン海戦^{注173}で敵艦の砲撃を受け沈没します。暗闇の海に沈没していく「霧島」には、救助艇の駆逐艦から渡り板が架けられていたのですが、任務の関係で避難が遅れていた私が渡り板を渡りきった瞬間、板は暗い海に向かって落ちて行き、何と渡り板で乗り移って助かった最後の一人でした。命との縁の深さに感謝しました。

その後しばらく鳥取の美保海軍航空隊で第十八期甲種予科練生に小銃の分解・結合など砲術の実地訓練を指導しました。十五歳から十九歳のまだうら若き青年たちでしたので、夜になると経験した海戦の話聞かせて欲しいとせがまれ、生徒たちの部屋で毎夜海戦の話に花が咲き、ほとんど教官室で寝たことはありませんでした。しかし、私は横須賀にある海軍砲術学校の第十六期特修科砲術練習生を命じられ、昭和十八年十二月に入校することになりました。美保は僅か数ヶ月でした。その時の予科練生たちがどうなったか、航空隊でしたので特に厳しい運命が待ち構えていたのではないかと思われませんが、その後の消息は分かりません。砲術学校特修科を終えた昭和十九年四月に、入団当初に乗り組んだ軍艦「榛名」に再び乗務命令が降りました。その時「榛名」はシンガポールにいました。

シンガポールまではいくつかの商船を乗り継いで行くことになりました。台湾の高雄から乗り継いだマニラ行きの商船「北京丸」でルソン島沖を航行中、敵艦からの魚雷の直撃を受け航行不能となりました。三発の魚雷のうち船首、船尾部を狙った先発の二発は外れ、最後の一発が中央部に命中しました。先の二発がもし命中していたなら弾薬・砲弾を積載していた場所であり爆発し助からなかったでしょう。浸水が始まるなかで、全く泳げない人もいました。浮遊物の板を命綱と思っても放さないようにと励まし海に入りました。約五時間の漂流の末、救助の哨戒艇に助けられマニラに上陸しました。泳げないと言っていた人も救助されていました。また助けられた哨戒艇では私のことを知っている人がいて、濡れて着の身

着のままの私を風呂に入れ、着替え一式を準備し、予備の下着まで持たせてくれました。人の親切が身に沁みて有り難く、未だに忘れ得ぬ思い出の一つです。

軍艦「榛名」でも三十六糎砲射手として昭和十九年十月二十三～二十五日のフィリッピンのレイテ沖の海戦に参戦しました。しかしこの戦いでは戦艦は護衛機の援護のない、丸裸状態の悲惨な戦いでした。「榛名」も米軍機の猛撃を受けましたが、近くにいた軍艦「武蔵」への攻撃は凄まじいものでした。次々に急降下しながら波状攻撃する米軍機には敵機ながら凄いと感じました。この猛撃を受け、島を一つ挟んだ先で「武蔵」は沈んでいきました。またこの戦いで忘れられないことの一つが米機の猛撃を受けた際、直属の部下の兵曹を亡くしたことです。一瞬の出来事でした。前日は私がその任務に就いていました。「榛名」での戦死者はレイテ沖に鄭重に水葬されました。戦友の残された遺品をご両親にお送りしたのが縁となり、父君が亡くなられるまで数十年の間息子のように親交をもっていたいただきました。

「榛名」はこの戦いのあと呉に帰港し、警備艦、予備艦として任務を遂行していましたが、昭和二十年七月末の空襲で壊滅的な損傷を受け、見るも無惨な姿と化しました。乗組員は江田島の兵舎生活でした。船の修復が始まる八月六日の朝、兵舎から任務につくべく行動を開始した直後でした。溶接の光のような青い閃光が走るや、ドーンという地響きとともに広島方面に大きなキノコ雲があがりました。広島への原爆投下でした。当初は原爆などとは分からず、新型爆弾らしいものが落ちたとの噂でした。間もなく江田島にも広島からの避難者が来るようになりました。夏の暑いなか傷口にウジ虫がはっている姿は見るに耐えない痛ましきでした。

終戦は江田島で迎えました。私たちの「榛名」乗組員は佐世保に帰ることになり、呉から汽車で広島を通過しました。原爆投下から十日程経った広島市街は、コンクリートの建物だけがポツポツと残るだけで何もない殺伐たる風景でした。車窓

から見た、まるまると膨れ仰向けに死んでいた牛の姿は今でも目に焼き付いています。無事佐世保近郊にある針尾海兵団に帰団し、解団となりました。

熊本の実家に帰っても暫くは何もする気力が湧きませんでした。そのうち砲隊の部下だった者に就職先を頼まれて世話をし、四国の松山にある戦死した戦友の墓参りをするなかで、私の戦争は一つの区切りとなったように思います。

その後農地改革が行われ、実家の農地も解放されました。私は残された田畑を守って八十六才まで稲作りをし、農業一筋で生きてきました。土を耕し水を引き、作物を植え、成長していく姿を見守りながら収穫するという平穏で平和な日々でした。戦争は勝っても負けても悲惨なもの、平和で平穏な日々ほど有り難いものはありません。

(文責 清水千賀子)

聞き取りを終えての感想

ボランティア 清水千賀子

熊本の実家の庭に一本のグミの木があり、六月になると大きな赤い実をたわわにつけます。このグミの木は父の亡くなった戦友のお父さんが送ってくださったもので、グミが熟れると子供心にそのことを思い出していました。

この度、戦争体験の聞き取りを依頼され、小さい時から断片的に聞いてきた戦争の話をきちんと聞いて書きとめようと思いました。娘の私の知らない父の世界であり、その後の父の生き方に大きな影響を及ぼしたに違いない体験と思ったからです。幸運なことに父は軍隊（海軍）時代の履歴表を持っていました。断片的に聞いてきた話を履歴表に沿いながら聞き取って行くことができ、主観は別として史実の面の記憶はほぼ正確におさえることができました。

聞き取りを終えて感じたことは、戦時下も今もあまり変わらない父の姿でした。人に関わる姿勢や仕事にたいする誠実さなど、人はどのような状況下でも本質はあまり変わらないのではないかという思いを受けました。ただ、その後の生き方が、地域への奉仕へ注がれて行ったことには、戦争体験が大きく影響しているのではないかとの思いがします。

父はまた八十五才頃から、生きている間にどうしても行きたい場所があると鹿児島島の霧島神社から始まり、沖縄の慰霊塔、群馬の榛名神社への参拝を兼ねた旅行をしました。不自由な足取りで休み休みながら数年がかりで念願を果たしました。今回の聞き取りでその意味と父の思いを理解できたように思います。

戦争を体験して

岩井 蔵乃助（布佐在住）一九一八年生

私は大正七年五月二十七日湖北村で番場家の六男として生まれました。兄弟は男六人女二人の末子です。湖北小学校の高等科二年を卒業後、取手園芸学校に入学しました。湖北小からは四名でした。学校ではマラソンの選手、柔道やテニスもしました。卒業後、従兄弟とともに父に内緒で志願兵に応募しましたが、通知がきてバレました。

独立混成第一旅団に入隊し、機械化兵団員十六人で六輪駆動車一台の係りでした。運転手の助手として特訓を受けました。北支で八路軍と共産軍の事件（支那事変）が起きて出動、広島↓宇品↓釜山↓公主嶺^{注174}に着きました。寒いところでした。酒井兵団長谷川部隊歩兵で入隊した時は十九歳で他の人より二歳若かったのです。禪^{ふんじし}一本で川を渡り伝書鳩を使って情報を伝えました。死んでもいいという覚悟でした。酒井部隊長に可愛がられ部屋の前では直立不動、部屋の中に入っては色々なものをご馳走になりました。特別待遇だったのです。

兄からの「女親が心配している、お前ひとりなんとでもしてやる」という便りで退役を考えました。

皇紀二千六百年（昭和十五年）退役し新潟に上陸、友人と三人名古屋経由で帰宅しました。元気で還った記念に湖北小学校奉安殿横に二宮金次郎像を寄付しました。兄が石材店をしていたので石材は台座は筑波産、像は岡山産の御影石を取り寄せました。祝賀会は湖北小学校の裁縫室で六、七十人が集まりました。

除隊後、日立製作所亀有工場に勤め六輪駆動車戦車を製作しておりました。南方での修理の依頼を受けましたが暑いところ

は苦手なので断りました。東京渋谷で運送業をしていた兄を手伝い馬で東京中を駆け回りました。西武グループ創始者の堤康次郎さんの疎開の仕事などもしました。

昭和十九年召集を受け満州奉天↓旅順湾へ。連隊長の命で北海道小樽に駐屯。酒好きの隊長の送迎をしたりしました。いい所でした。

札幌の司令部に移動。橋本中尉が着任。命を惜しがってはだめ、何時でも命を投げ出すつもりでしたから重宝がられました。周囲からは妬みもありました。

本隊は船でエトロフ^{注17}に移動、自動車はあかつき部隊に預け、小さな船で身一つで上陸本隊の元にいきました。掘立て小屋の雨水を貯めて野菜を作りました。大工は好きでした。エトロフで一年、三、四〇〇人で終戦を迎えました。

昭和二十年八月十三日満期除隊になっていました。エトロフから樺太（カラフト）へ。漁師姿でロシアに上陸し、二、三人で分宿していました。五十人が捕虜になり大泊（コルサコフ）^{注17}に移動させられました。言葉が解らず不安でした。

捕虜生活（ポルトニク）ではロシア兵から軍用毛布で奥さん達の服を作れと命令され、スカートやマントをミシンで縫い、ミシン針もつくりました。とても喜ばれて戦利品（ドイツからの）を貰ったりしました。山から木を切り出す仕事もしたし風呂も作りました。なんでも食べたが燕麦^{えんばく}^{注17}は旨くありませんでした。そのうち言葉を早く覚えたので奥さん達が安心して付き合ってくれるようになり、カーシャ（肉入りお粥）をご馳走になったり、川で捕った鮭とバター・タバコ等と交換したりしました。言葉を覚えたのは良かったと思います。毛布では半ズボン縫って隊長にも喜ばれました。

昭和二十三年帰国しました。俘虜^{注17}用郵便葉書が家内宛てにきていました。還ってから兄嫁の作ってくれた稲荷寿司を三十個も食べたことを覚えています。

召集前の昭和十八年岩井家に婿入りし男子二人、女子一人のこどもに恵まれ、今は孫と家族六人で暮らしています。

思い返してみると辛かったことは終戦五日でロシア兵が上陸して、捕虜になり言葉がわからず恐かったこと。老婆が強姦され、子女を外に出さず匿ったこと（後にロシア兵は軍法会議にかけられた）なども思い出します。

今の戦争に「人」は要らない!!ボタン一つでどうにでもなる時代。

首を切れと（上官に）言われていい気持ちはしない。私たちの年代の者はみな戦争は反対だよ。もう懲り懲りだよ。

（文責 遠藤洋子 重田幸子）

聞き取りボランテイヤ感想

ボランテイヤ 遠藤 洋子

訪問しての聞き取りとお聞きしていたので、もしかしたらご体調が？と案じていましたが、お会いしてみると元気ハツラツ、カクシヤクたるお姿で最近まで、銚子へも自転車で行かれていたとの事、びっくりしました。

お話は郷土史を紐解くように、ご自身と関わりのある歴史上の方の名前が次々と登場、ともすると興味と関心がそちらに向けられるほどたくさんのお史実の流れを捉えていらっしやいました。今回はどこまでも戦争体験に絞ってまとめました。短い時間での聞き取りになりましたのでまだまだ話したいこともあったのではないのでしょうか。私ももっとうかがいたいと思いました。

聞き取りボランテイヤ感想

ボランテイヤ 重田 幸子

岩井さんのお宅の庭は秋の草花が一杯でした。ご趣味の大工道具や材料がたくさん置かれています。最近のご近所のお友達のところを日に何度も訪ねておられるとのこと。穏やかな日々を過ごしていらっしやるようです。

古いアルバムを何冊も見せて頂きました。そこに写っている何枚かは戦死された戦友のものかと思われます。当時の仲間の皆さんが纏められた本もあり戦争の記録が残されていました。復員後のお話があまり聞けなかったのは青春の時機を戦場で

過ごされた岩井さんの心の中の思いの重さなのではないでしょうか。

私たちの父親の世代は皆が戦争に巻き込まれました。応召はしなかったものの兵器製造の工場で仕事をしていた父が当時の話をしながらなかった心の内なども改めて思いながらこの文をまとめさせて頂きました。

学童疎開に同行して

鈴木 利恵子（白山在住） 一九二三年生

私は大正十二年七月十日生まれです。東京足立区千住仲町に生まれ育ちました。

女学校を卒業後は、銀座にある第一徴兵保険会社のタイピストとして働いていました。戦局が厳しくなってきた昭和十九年、私が卒業した千寿第二国民学校の学童疎開が始まり、寮母として行って行くと依頼がありました。妹は五年生で同校におりましたし、父が「学校からの依頼だし、妹の側にいてやれるのでお前も行くように」と申しましたので、なかなか辞めさせてくれない会社を無理に辞め、同年七月長野に向かいました。

三年生から六年生の子供たち二百八十九名、先生九名、寮母十九名で長野県野沢温泉村に疎開しました。五軒の旅館に分散逗留とんりゅうします。六年生男子は二軒に分れ、私は先生一人と四十二名の生徒を担当しました。私たちが入った大和屋旅館は小さなスキー宿で、内風呂はありませんでしたが、農家をしていましたので比較的食べ物には恵まれ、ご主人は村役場の役員をしていらしたことから何かと面倒を見て戴き、子供たちは幸せでした。それでも食糧難の時、白いご飯は大晦日のお祝いだけです。大根を米粒くらいに細かく刻み、大きな箆に入れて共同温泉の湯釜で茹でます。戦争が酷くなると、蕎麦やうどん屑、ふすまなども食べました。

湯釜は三つあり、調理用、洗濯用などに分けられていました。石けんがなくてもお湯が出ますし、千寿の学習院と言われるくらい、裕福な家庭の子供が多く、わりとシラミはわきませんでした。それでも場所によってはシラミが凄く、お風呂か

ら帰ると一人一人の脱いだ下着を調べて潰したものです。それを熱湯で洗い綺麗にしていました。温泉地でお湯が豊富にあるということはたいへん助かりました。子供たちが学校に行っているあいだに寮母たちで、須坂までおやつのリングを買に行くこともありました。十一月から五月までは雪の季節で一階は雪に埋まり二階の窓から出入りしました。洗濯するにしても湯釜まで行くのは大変でした。

朝生徒を起こして学校に送り出します。一人寝小便をする子が居りまして、夜中十二時頃そつと起こしてトイレに連れて行ったり、誰にもわからないように布団を干して片付けたりもしました。戦後この子は牧師さんになりました。二、三年前の食事会のとき、その子が「お姉さんのおかげで帰る時には寝小便が治っていた」と言って、皆を笑わせました。当時私は二十歳でしたから、子供たちと十もちがわないのでお姉さんと呼ばれていました。

分散逗留している旅館のなかには、食料に不足しているところもありました。ある子が「弟がお腹を空かしているといけないから、僕のこれ持って行ってもいい？」と言うので、「いいけど、人に見つからないようにするのよ。帰りにお姉さんのお部屋にそつとおいで。」と言って私の分を残しておいて、その子に食べさせたりしました。

昭和二十年三月に六年生は卒業となり東京に帰ることになりました。卒業式などできない状況です。雪で電車は動かず途中子供たちは三里の道のりを歩きました。千住で子供たちを父兄に引き渡し、私はまた野沢に戻りました。その後四月に、直江津が艦砲射撃を受けて大変でしたので、温泉地は狙われるからと、飯山に移動して五カ所のお寺に分散逗留しました。ここでの生活は一番食べ物のない時でした。子供たちが山から露つみをとってきて、少しの米を入れて炊くのですが、匂いも凄く大人の私でも喉に落ちこちないんです。でもそれを食べないといけないのですから、これは辛かったですね。お風呂は五右衛門風呂ひとつでした。八月十五日に終戦を迎えますと、近くの農家では、アメリカ兵が入ってくると娘は悪戯されるか

らと、大八車に布団や娘さんに乗せて山の奥に隠すなどの騒動もありました。

私たちは昭和二十年の十一月まで飯山に居りました。

千住は焼け野原となり、両親は綾瀬に移っていました。帰る時に荒川を渡ると、死体が幾つも浮いていたのを覚えています。兄も弟も徴兵され、それぞれ陸軍、海軍に従事しますが、幸い親族の中で戦死者を出すことはありませんでした。

千住界限は空襲で学校も実家もすっかり焼けてしまいましたので、疎開生活を共にした子供たちと連絡のしようもありませんでした。三十一、二年位前に牧師さんになった子が奥さんとお子さんを連れて、我孫子の我家に尋ねてきました。私の住所が判らないので、野沢の大和屋さんまでスキーに行き調べたそうです。これをきっかけに、牧師さんが中心になって数名に連絡が取れまして、昭和五十年新橋の第一生命ホテルではじめての食事が持たれました。その時置き時計を子供たちから戴いて、今でも飾っております。いまだに年に一回この食事は続いています。

平成元年三月二十五日、昭和十九年度卒六年生二十六人の四十四年振りの卒業式が行われました。たいへんお世話になったお姉さんと呼ばないと卒業式にならないと、私も呼ばれました。これは足立区の新聞にも載りました。

私は娘に、疎開やその後の出会いの資料一式を、私が死んだらお棺に入れてね。と言っております。戦争中は辛い大変な時代でしたが、疎開の地で触れあった人たちとは、今でも強い絆で繋がっています。

私事ですが、昭和二十三年か二十四年頃から、毎年八月十五日に戦争の苦しさを忘れないために当時のままのすいとんを作り、食べております。



(上) 昭和19年 大和屋旅館にて

(下) 千寿第二国民学校の昭和19年度6年生の卒業式は、平成元年に44年ぶりに行われた。
前列左から3番目が鈴木さん



聞き取りボランティアに参加して

ボランティア 陶 くみ枝

母校の学童疎開に寮母さんとして同行され、小学六年生の男子四十二名のお世話をされた鈴木さんは、「子供たち」とか「あの子が」と語られる時、実に優しいまなざしになられます。

二十歳の鈴木さんと十二歳の少年達とのエピソードは、細やかな思いやりで満ちたものでした。

食糧難、雪深い土地、たぶん鈴木さんにとつても初めての親元を離れた生活でしたでしょう。敗戦が色濃くなる時代に慣れない疎開地での生活は私の想像を超える大変なものであったと思います。「大変なご体験をなさいましたね。」との問いに「いえ、楽しくうございました。」と答えられます。

六十六年が経過し、さまざまな困難は浄化され美しい物語になるのでしょう。試練を共有した者同士だけが解りあえる深い記憶となっているのだと感じます。鈴木さんも少年たちも、困難に対し必死に曇りのない心で向き合ったから、今も強い絆で繋がりがあえるのだと思いました。再会後毎年行われる食事は、さぞかし時を飛び越えた熱いひとときなのだろうと想像します。

鈴木さんは戦後も、疎開先であった大和屋さんや野沢の方達と交流されているそうです。膝をお悪くされて、一昨年もう伺うことができなくなるとご挨拶されてきたそうです。

戦争は二度と繰り返してはならないと思うのですが、暗い時代にも人と人が繋がることのできた優しいお話に暖かい気持ちになりました。

聞き取りボランティアの感想

ボランティア 濱田 洋子

鈴木利恵子さんは戦後間もなく結婚されて、ご主人の職場があつた我孫子に住まわれましたが、数年後、利恵子さんと幼い一人娘さんを残しご主人は他界されました。戦後復興に向け、日本中の大人たちが一生懸命に働いた昭和二十年代です。鈴木さんは我孫子で子育てをされながら、保育園勤務に始まり、後に定年退職まで我孫子市役所に勤務されました。戦時中に、数少ないタイピストとして就職され自立した女性としての経験と、大勢の疎開児童を預かる寮母としての体験が、さまざまな苦難を乗り越えてこられた原動力だったのではないかと思います。当時の資料や、二十歳前後の鈴木さんと子供達の貴重な写真を見せて頂きながら、私の経験できなかった戦争体験を伺うことができました。

私は九歳の時に終戦を迎え、鈴木さんより四歳上だった兄の戦病死、中国からの引揚げなどを体験しました。その頃の事は「戦後六十周年平和事業記念誌」の平和祈念文集に寄稿させていただきました。また、平和事業運営委員としてイベントのお手伝いもさせていただきました。今回も、聞き取りボランティアに応募できて有り難く思っています。

戦後六十五周年を迎え、核兵器廃絶とテロや戦争のない平和な世界の一刻も早い実現を目指して、皆で力を寄せ合ってくださいと一心に願っています。

戦地十四年の思い出

渡辺 良一（天王台在住） 一九二六年生

私は大正十五年三月十五日大阪に生まれ、二ヶ月後に山梨県に移り十六歳までここで育ちました。十七歳の時知人を頼って満州に渡り、スパイ養成の学校に入りました。戦況が逼迫ひっぼくしていて繰り上げ試験に受かり、満州国の警官の委任官支補で採用され現在の国竜江省黒河市で終戦まで、秘密警察（主にロシアのスパイを摘発）の仕事をしました。ここでの勤務が後の運命を大きく左右したと思っています。

二十年八月十日、ソ連軍が黒竜江を越え黒河に侵攻してきました。前日まで平穏であった街は蜂の巣をつついた様な状態で、馬車や人力で逃げまどう中多くの人が飛行機の機銃掃射で亡くなるのを見ました。関東軍の飛行機は一機も飛ばず、戦車は来ず、大砲一発も撃たれませんでした。

関東軍の軍都の孫呉そんごに集結することに成って、三人の女子電話交換手を連れて雨の中を歩いて入りました。そこには多くの軍人、民間人が集まっています、八月十五日ここで日本軍は武装解除を受け、私もここでソ連軍の捕虜に成りました。

捕虜になった後、ブラゴヴェシンスクに渡るのですが、雨に濡れて多くの人が死にました。

九月にはペトロ市に移され、シマノフスクというところで一冬過ごしましたが、着る物もなく飢えと寒さで多くの人が死にました。私は少しギターが弾けたので（ギターなべさん）と呼ばれていました、黒河からの同僚の堤さんが、

「なべさん、皆死にそんな人ばかりだ、広場に寝ているから慰問してやろう」と言われ、ソ連軍からギターを借りて弾いた事がありました。人生の並木道等を弾きました。「帰りたいな、いいな、いいな」と言いながら死んでいった人もいました。

二十二年六月二十四日ハバロスクに移り、軍事裁判を受けます。五十八条六項政治犯スパイ活動の罪で裁かれました。判決は死刑、裁判官が最後に言いたいことがあったらと言われ。「勝てば官軍負ければ賊軍、もし日本が勝っていればあなたが私の代わりにこういうところに座るのだ、ちつとも悔い無い天皇陛下の為に死ぬのだから」と言い放った私でした。後に判決は死刑から二十五年の強制労働に変更になった。ハバロフスクの監獄には三波春男もいました。

七月イルクーツク、チタ、アルマアタ、ノボンシルスクを通ってカラガンダ収容所に着きました。カラガンダ収容所は現在カザフスタン共和国に成っています。

この収容所で十一年間の強制労働に従事しました。仕事は炭鉱夫でした。三交代で地下五百メートル下でエアハンマーを使って石炭を掘る仕事でした。わき水がひどく辛い仕事でした。この地は夏暑く冬寒く零下三十度にも成るところでした。寒く、食べ物もよくなく、多くの人が死んで行きました。

この収容所にはドイツ人、ウクライナ人、エストニア、ラトビア人、ロシア人、中国人、朝鮮人、等多くの民族が収容されていました。部屋は地下にあり、ペチカがありました。ソ連の革命記念日には異国の友と私はギターで合奏をして収容所の人々に楽しんで貰った事もありました。事あるごとに私はギターを弾いて戦友の前に出ていたもので、内地に帰ってカラガンダ戦友会の席で見知らぬ戦友からあのときはギターに慰められたよとよく声をかけられました。

民族が違っても、心はつながると言うことをここで経験しました。ある時、私が熱を出して肺病が疑われ、死にそうに

成った時、朝鮮の人たちが、「渡辺さんを死なせてはいけない」、肺病に効くのは赤犬の脂が効くと言って、皆で捕まえて料理して迎えに来て、食べさせていただき、一命を取り留めたことがありました。

住居は民族ごとに別々でしたが、皆あっちに行ったら、よいことは無いと止めましたが私はよく朝鮮の住居地を訪ねていました。困った時救いの手を出せば、向こうも手を出すということでしょう。人の心は皆同じという事を感じました。

三十一年十二月ナホトカ港に集合し、帰国することに成りました。

当時私は心臓を患っていましたので、税関を通るとき一番初めに名前を呼ばれ興安丸に向かい乗り込みました。赤十字の看護婦さんがタラップまで降りてきてくれて、大変だったね、ご苦労さまと慰めてくれました。船中に入るとカメラマンが一斉にシャッターを切ったのにはびっくりしました。

船が出るとき祖国に帰る嬉しさより、シベリアの地に多くの戦友が埋まっているのかと思うと、戦友は帰れない私たちは帰れる、流れる蛍の光は寂しい気持ちで一杯になったのを思い出します。

舞鶴港に入港したときは舢舨で百人ずつ乗っての上陸でした。一番の舢舨に乗りました。港は多くの人であふれかえり、歓迎の幟が立っていたが自分の幟は目に付かず、肉親はどこにいいのか見当がつかなかった。押し寄せる人垣で通路は狭く、どんどん進んで行ったら突然ぱつと手を握ってくれた人がいました、お袋でした。私は声も出ませんでした。カメラマンが写真をとっていました。山梨の新聞に母親と抱き合っているところが報道されたそうです。母は私の帰国は前もって新聞に載っていたそうで、それを見て舞鶴港に迎えに来ていたのでした。

父は六十一歳で亡くなったそうです。私がカラガンダ収容にいたときでした。

捕虜、戦犯に成ってから肉親とは連絡は取れなかったので、私は移る収容所の先々で「山梨、渡辺良一、何月何月まで健

在」と壁などに記していました。誰か見つけて肉親に伝えてくれたみたいで、父は監獄で息子は死刑に成ったと思いがら亡くなったみたいです。

十七歳で満州に渡り三十一歳に成った時帰って来ました。戦地の生活十四年、帰国してから五十二年経ち、現在八十三歳に成りました。満州での戦争体験、ソ連での捕虜生活には多くの悲しい思いで、別れ、出会いがありました。思い出したくない悪夢の出来事にも多く関わってきました。

今一番感じる事は、一言で言えば「戦争はだめだ、いいことは一つもない」の言葉につきます。本当に戦争はだめだ。いいことは一つもない。これが実感です。

(文責 新留勇 陶くみ枝)

聞き取りボランテイヤ 感想

ボランテイヤ 新留 勇

渡辺さんにお話をお聞きしました。主に十七歳で満州に渡り三十一歳で帰国した期間を中心にまとめてみました。

渡辺さんは現在八十三歳ですが、能弁で体験されたことを昨日の事のように記憶されており、よどみなく話をされました。会うなり、昭和三十一年十二月二十六日舞鶴港に興安丸で帰還した事や近衛文隆、瀬島龍三に関する話を切り出され聞き取りが始まりました。兵役の身体検査は二十年二月四日、甲種合格。二十二年三月二十五日ハバロスクの監獄に入り、同年六月二十四日軍事裁判で死刑の判決を受けた事。同年七月一日イルクーツクに收容された等、その他の事も何年何月何日にあつたと克明に記憶されていて、びっくりしました。しかもすべて五十年前以上の出来事です。体験の一つ一つが、希有の事ばかりで脳裏に刻み込まれたのだろうと思いました。

渡辺さんはソ連での抑留生活十一年、一番最後まで留め置かれました。一日に粗末なパン六〇〇グラムが支給されたそうですが、飢えと寒さの中の過酷な労働に耐えて、生還出来て本当によかったと思いました。肉体的に若いのが幸いですと思います。又、(ギターなべさん)と親しまれギターで多くの戦友を励まされた事等が心の張りに成り、生き抜いて来られたのだと思いました。人は楽器の一つも奏でられるといいものだなとも思いました。

私の父も四年間シベリア抑留され、昭和二十四年に帰国しました。タシケント(現在のウズベキスタン)での收容所の生活はあまり語らなかつたけど、母には寒かった事、食料が悪かった事などを話したそうです。支給された飯盒に食べられる青物を集めて、岩塩で煮て食べて飢えを凌いだそうです。燃料は乾燥した馬糞を拾ってあてたそうです。帰国後、あの思

いをすればどんな物でも食べられると話したと聞きました。

抑留後自分の生死を故郷に伝えられない渡辺さんは、収容所が変わるごとに自分が生きていることを壁などに書き残し、誰か故郷に伝えてくれる事を信じていたそうです。多くの人が同じような事をしたそうですが、情報が伝えられた方は幸いだったことでしょうが、消息が判らないまま亡くなった関係者も多かった事と思います。

父は偶然にも同じ部落の後輩と一緒に、早く帰った後輩が無事を知らせてくれたそうです。昭和二十四年のお盆に親戚が集まっている時、父からの葉書が届きました。竹先で炭をつけて文字を紙に深く刻むように書いてあったそうです。検閲を受けた後があり、塗りつぶした箇所が多くあり、読めたのは、ひよこを育てておけと言う内容がかすかに読めたそうです。私の田舎(鹿児島)は祝いの時は必ず鶏を食べます。ひよこが育つのは半年後、一月頃帰って来るとみんな喜んでそうです。父はその年の十二月二日舞鶴港に帰って来ました。新聞に帰国者の名簿が載り、叔父と弟が迎えに行ったそうです。

渡辺さんが終わりに「戦争はだめだ、いいことは一つもない」と、しみじみと言われた言葉が今でも耳朶に残っています。戦後六十三年日本は平和で、私の世代は幸いに戦争を体験しなくてすみそうです。子どもや孫の世代も戦争の惨禍にあわないように祈ると共に、平和な社会が続くように、今私の出来ることをしていきたいと思えます。

聞き取りボランティアに参加して

ボランティア 陶 くみ枝

初めての聞き取りボランティアで、お話をうかがった渡辺良一さんは、広肩幅の背の高い紳士でした。今年八十三歳になられ目が少しご不自由とのことでしたが、お話は明確で、六十五年を経ても出来事や日付、その地名を淀みなく張りのある声でお話しされます。

ソ連抑留十一年という凄まじい体験をされた渡辺さんは、昭和三十一年十二月舞鶴に降り立ちます。千人余の帰還兵を迎える家族や報道陣に沸き立つなか、渡辺さんとお母様の抱きあう写真が新聞に掲載されたそうです。昭和三十一年と言えば、敗戦後の混乱も治まり、朝鮮戦争の影響で日本経済は拡大、神武景気に沸くなか経済白書には「もはや戦後ではない」と記された年です。

八十三歳の渡辺さんを前にして、青年の姿を想像します。二十代の全てを酷寒の地で炭坑夫として強制労働に従事された渡辺さんのお話は、国家に翻弄された時代に生きた市民の代表のように響きました。形を変えたたくさんの方の渡辺さんがあの時代を生きられたのだとおもうと、今日ある平和を実感します。テレビドラマとなった「不毛地帯（山崎豊子著）」のモデル、瀬島龍三さんともシベリアで一緒だった時期があるそうです。

渡辺さんは、ナホトカから帰国船興安丸に乗り込み「蛍の光」が流れると、たまらない思いに駆られたと言います。「この地に眠る戦友を残していくのは辛かったね。蛍の光は寂しすぎた」と。私は望郷の日本に帰れる喜びを語る前に、離れる切なさを語る渡辺さんを見つめながら、その体験の深さを思いました。多くの死に接し、何度か死を覚悟しながらも、

凛として自らの行いを客観的にみつめます。「酷いことをしたよ（ソ連スパイに対して）」「戦争は駄目だ。いいことなんてなにもない」と語る短い言葉のなかに、辛い体験から得た次世代への強いメッセージが込められていると思えました。

戦後生まれの私たちは、幸いにして他国民を直接殺めることなく今に至っています。「戦争の放棄」「戦力の不保持」「交戦権の否認」の平和主義を規定する日本国憲法によって守られているのだと思います。

プラハのオバマ演説から、社会の流れが変わったと感じます。核廃絶のうねりを大きく膨らませ、現実のものにしていく行動に加わりたいと思いました。